

雑誌『能海』の行方

関屋俊彦

いきさつ

雑誌『能海』は、戦前に台湾で発行された能楽専門の雑誌である。2005年3月にさる古書目録を通して購入した。二冊だけで大した期待もしていなかったのだが、届いたのを見て驚いた。発行所は台湾能楽会になっているが、中国語で書かれているのではなく、全文日本語である。発行が大正五年となっていたので、ピンときた。戦前、台湾が日本の統治下にあった時に発行されたものに違いないと。

その後、インターネットで「能海」をキーワードとして検索したり、古書探索にかけたり、図書館のレファレンスサービスでもお願いしたり、台湾の事情に詳しい方に聞いたり、専門の方にも伺ったりしたが、朗報は帰ってこなかった。法政大学能楽研究所にも早稲田大学演劇博物館にもない。このころ類似のものとして『能楽』があるが、管見の限りでは『能海』に触れる記事は出てこない。能楽の新聞記事を集成した『大正の能楽』（国立能楽堂）にも載っていない。

今回、森瀬壽三氏から原稿依頼があり、氏の見事な引き際に敬意を表して、氏の御専門にいくらかでも近いところでの一文をとの思いがあり、あわせて情報提供を願い、あえて記すものである。

書誌と目次

架蔵となった『能海』2冊は次のようなものである。

寸法：221×151ミリ

編輯兼発行：台北八甲街八十九番戸 桂六兵衛

印刷人：台北々門外街二丁目二十三番戸
黄阿土

印刷所：同 黄塗活版所

発行所：台北八甲街八十九番戸 台湾能楽会

① 第二年第二号（大正五年二月一日）目次

[口絵] 橋弁慶の図 石版

能と人格

謡曲要集

能楽梗概 弱法師

悪魔払

高砂と羽衣狸々

狂言の葉 節分

息継に就て

三流合同歌仙会提議

家の宝とせる 雲井の舞

観世流素謡席順訂正

能評

鎌倉舞台初会 観世会初回

雑録

大正式仕舞付

御国御用御能御囃子控

奈良土産の評判記

消息

演奏会 台湾能楽界 内地能楽界

② 第二年第三号（大正五年三月十日）

[口絵] 小飛出の面 写真版

一筆啓上

謡曲要集

小川尚義

桂 秋声

故喜多古能

大正街騒士

中村房秋

秋声

白雲流水

喜多六平太談

鈴木重義

白雲流水

八戸岩三郎

皓月生

小川尚義

能楽梗概 忠度
悪魔払
謡の文句扱ひ
謡曲初学問答
狂言の葉 梟山伏
祝言小謡
曲と浄瑠璃
面に就て (小飛出)
能評
宝生会 観世乱能
雑録
新作能の出来るまで
謡曲に現たる名数
頭汴坑紀行
同上
兄弟流儀違の往復
消息
演奏会 台湾能楽界 内地能楽界

桂 秋声
故喜多古能
白雲流収
台峯山人
皓月生
五仙堂吟花
引板の舎
口絵の解
祓瘡

山崎楽堂
泰平道人
山の人
里の人
楽山生

第三号の「曲と浄瑠璃」では、浄瑠璃の大隈太夫が謡を大事にしていたことを記す。

「小飛出の面」は、台北の高石氏所蔵とされる。この面もどうなったものか。

二冊の発行年月日から類推するに創刊号は、大正四年一月一日であったものか。いずれにしてもいつまで発行されたのかはわからない。

当時、台湾での能楽は、台北と台南で結構盛んであったようである。『能楽』は、この『能海』については触れていないが、『能海』発行に近い大正四年で拾ってみると、観世流として高砂観世会、宝生流として紫雲会・五雲会の名称が目を引く。たとえば「台南五雲会は去明治四十三年中安富元光氏を師範として台湾南部に於ける謡曲界率先として創立」(二月号)とある。

まとめにかえて

思い起こすと「佐久間寛台と『謡言粗志』」(拙著『狂言史の基礎的研究』和泉書院所収)を書いた時、佐久間朗氏から戦前、同本は台湾に持ち運ばれた。引き揚げる時、それを入れていた箱は台湾に残しておかれたとのことである。箱書は幸い『石川県史』の写真で見ることができるが、なぜ台湾で必要とされたのか台湾での能楽の盛んであったことを考え合わせると納得できるような気がする。

又、台湾だけでなく満州とか日本の領土であった時代にそれぞれの地で能楽が盛んであったこともあまり明らかにされていない。あるいは謡を謡うことが、それこそ内地を離れた人々の楽しみであったかも知れないのである。侵略戦争云々を言う前にどういう実態であったのかを知りたい。少なくとも『能海』のバックナンバーが明らかになれば、これほどの能楽専門総合誌であるので能楽研究の寄与となることは明白である。情報提供の御協

解題抄

編輯兼発行の桂六兵衛は、進藤流の能楽師であったようだ。

発行所「台湾能楽会」すなわち発行者「桂六兵衛」の住所であるが、吉本祐子氏の教示(「中国・香港・台湾主要サーチエンジン」)によると、その所在地「台北八甲街八十九番戸」は、現在「萬華」と称し、やはり当時の日本人居住者街であったところである。

第二号・第三号の「悪魔払」は、天明七年の序・跋を持つ喜多七太夫の型付で、活字化されたのは大正十年十一月になってからである。

「白雲流水」は、喜多流の人である。

「御国御用御能御囃子控」は、文政四年の江戸城における能組であるが、筆者の八戸岩三郎は次号で訃報欄に載り、従って、中断のやむなきをえないことになってしまっている。台北の喜多流師範であったようだ。

力をお願いしたい。

本稿は2005年12月の六麓会で報告したものである。論文にはなりそうにもないので、このありがたい機会を利用させていただいた。御教示くださった方々に感謝する次第である。